広報資料
（経済同時）

西陣を中心とした地域の活性化
温故創新・西陣

令和２年３月１２日
京都市総合企画局
プロジェクト推進室
電話：075-222-3992

西陣 connect

京都市 CITY OF KYOTO　・HAKUHODO・

「西陣 connect」によるコラボレーション作品の完成及び出展予定の「サウス・バイ・サウスウエスト ２０２０」中止について

京都市では，「西陣を中心とした地域活性化ビジョン」の推進を図るため，活性化プロジェクトの一つである「西陣 文化のスタートアップスタジオ構想」(※) を提案した株式会社博報堂と共に，その構想実現に向けた具体的な活動「西陣 connect」(※) を展開しています。

「西陣 connect」では，西陣と国内外の企業や人をつなぎ，西陣にイノベーションが創発しやすい環境をもたらすため，その最初の取組として，西陣の伝統技術と異業種の企業との共創による商品開発を進めてきました。

この度，２つのコラボレーション作品が完成しましたのでお知らせします。

なお，これらの作品を世界最大級のクリエイティブの祭典「サウス・バイ・サウスウエスト(ＳＸＳＷ)２０２０」に出展する予定としていましたが，同イベントが中止となったため，完成した作品の展示・公開方法については改めてお知らせします。

１　完成したコラボレーション作品

PROJECT “DRESS”

アウトサイダーアートと西陣の織り手による ウェディングドレス製作

アウトサイダーアーティスト，西陣の織り職人，世界的ファッションデザイナーの異色の３者が，ジャンルを超越して１つのプロダクトを作り上げた。完成したのは世界にひとつだけの「西陣ウェディングドレス」。

PROJECT “FURNITURE”

シンガポール家具ブランド”SCANTEAK“と 持続可能性を大切にする西陣ファーニチャー開発

環境に配慮した家具ブランドと，文化を後世へ残したい西陣職人が，持続可能性をテーマに家具を共同開発。第一弾シリーズ「OBI（帯)」が完成。

今後「ORIKI（織り機)」「UNAJI（うなじ)」シリーズを随時発表予定。

２　その他

完成した作品は，アメリカ合衆国テキサス州オースティンで開催される世界最大級のクリエイティブの祭典「ＳＸＳＷ２０２０」の「トレードショー」（３月１５日～１８日）に出展し，西陣の魅力と可能性を世界に発信するとともに，今後，更なる西陣との商品開発や共同事業に発展するような，企業や人とのつながりの獲得を目指していました。今回，新型コロナウィルス感染症が拡大している状況を踏まえ，同イベントが中止となったため，完成した作品の公開・展示方法については今後検討し，決まり次第お知らせします。

【参考　「ＳＸＳＷ」について】

「ＳＸＳＷ」は，アメリカ合衆国テキサス州オースティンで毎年３月に開催される，音楽，映画，最先端技術等を体験できる世界最大級の複合型イベントです。

期間中は，様々なトークイベント，展示，ライブ，上映等が行われ，世界中の企業が多彩なコンテンツを発信するマーケティングの場としても注目されており，多くの人や企業が訪れます（2019 年には 106 カ国から延べ 41 万 7,400 人が参加）。

「ＳＸＳＷ」最大の展示会「トレードショー」は，世界的な大企業や新興企業が最新のアイデアやプロトタイプ（試作品）を展示する場となっています。

※「西陣 文化のスタートアップスタジオ構想」は，西陣の未来の担い手となる若者を地域に呼び込み，ブランディングやマーケティング等の博報堂の専門チームと西陣の地域が一体となってサポートすることにより，起業家や職人を地域全体で育てるための体制づくりを目指す中長期的な構想です。

※　「西陣 connect」は，上記構想の実現に向け，西陣の伝統技術と異業種の企業との共創による商品開発等により，西陣の魅力を広く情報発信し，国内外の企業や人を巻き込み，西陣にイノベーションが創発しやすい環境をもたらすための具体的な活動です。

「西陣 connect」ホームページ　https://www.nishijin-connect.com/
コラボレーション作品の英語対応ホームページ　https://www.nishijin-connect.com/english

クリエイター プロフィール＆コメント

PROJECT “DRESS”

アウトサイダーアートと西陣の織り手によるウェディングドレス製作

やまなみ工房 / 中尾涼 RYO NAKAO

1998年生まれ。１９歳まで京都市で育った後甲賀市へ移住、2017年から「やまなみ工房」に所属する。幼い頃から、電卓やデジタル時計、CDプレイヤーのディスプレイをずっと眺めて過ごす事が好きだった彼は、そこで見て覚えた数字を紙に書き写した。次第に興味は、数字だけにはとどまらず、雑誌やゲームソフトのパッケージに書かれている英字なども書くようになる。今では様々な画材や素材を使い、数字や文字を描くことは彼にとって楽しみの一つであり、幼い頃の想いがそのまま今も作品に反映されている。

原画を、織物に。

加地金襴 / 織り手 坂田雄介 Yusuke Sakata

大学で建築を学びハウスメーカーでの勤務を経て加地金襴（株）に入社。織りに従事し日々学びながら、外から見た金襴の良さと受け継がれてきた技術を融合させ新しい金襴の開発・発信を目指す。

＜COMMENT＞

アーティストの想いを生地にする為に何ができるのかを考えました。限られた組織、色使いでその想いを表現することが大変でしたが、職人としての想いをぶつけた生地を織ることができました。

織物を、ドレスに。

ROGGYKEI / 興梠仁 Hitoshi Korogi + 興梠景子 Keiko Korogi

大阪を拠点に活動するデザイナーデュオ。インポートやストリートのセレクトショップ、古着屋などで働いた後、パターンメイキングを学び、ROGGIKEIを立ち上げる。“UNISEX” “TIMELESS” “NEUTRAL”を構築したライフスタイルをコンセプトに、パリファッションウィークにて展示会形式で発表するコレクション以外にも、国内外のアーティストへの衣装製作や、ホテル、カフェ、和菓子店、洋菓子店、 プロバスケットボールチームなどのユニホームデザインも手掛ける。現在、コンセプトショップ兼アトリエを大阪中之島に構えている。

＜COMMENT＞

ウェディングをテーマにしたのは、アウトサイダーアートと加地金襴さんとの共通点である「パワー」「スペシャル」「美」の3つのキーワードから普段着ではない心に最も影響を与える特別な日に着る洋服が良いと思ったから。中尾さんの作品を拝見し、心打たれる強さはもちろん、色や間の使い方に多大なるセンスを感じ織りにしたいと思いました。それと、客観的には作風がウェディングと結び付きにくいので逆に試したい思いも同時に湧きました。坂田さんの工場で制作工程、製品、織り機、糸と拝見し、根気のいる細かい作業、糸色の美しさ、織り上がりの絶大なる上品さに感銘を受けました。ポイントは、生地無駄を最小限に抑えながら柄を生かしたデザインで柄のはめ込みと生地の無駄を最小限に抑えることに苦労しました。

PROJECT “FUNITURE”

シンガポール家具ブランド”SCANTEAK“と持続可能性を大切にする西陣ファーニチャー開発

フクオカ機業 / 代表取締役社長 福岡裕典 Hironori Fukuoka

創業118年の由緒ある西陣の企業で、創業当初から絹織物だけでなく、時代に先駆けた織物を手掛けている。無形文化財保持者のもとで主に製織と糸染めを勉強し、今もなお自身で製織や糸染めを行っている。平成10年には炭素繊維特殊織物の開発を開始。平成24年伝統工芸士製織部門認定。

＜COMMENT＞

織物のたて糸は黒と白のみで表現していくため、よこ糸として使用する色が非常に重要になってきます。椅子と一体となった西陣織として最も目を引く色のバランスを考えて、糸の染色からこだわって作り上げました。着物の楽しさを知って頂くきっかけになればと思っています。

柄に関しては、弊社の得意とする有職文様を採用しました。有職文様は、日本において格調高い文様です。これをきっかけに日本の文化にも触れて頂ければと思っています。

織物と家具を融合。

チーク材家具ブランド/スキャンティーク

SCANTEAK
feel at home.

＜COMMENT＞

昔から織物は椅子やソファーを構成する素材として長く使われてきました。今回共同開発の機会を頂いてその成り立ちや思いを聞きながら、家具の従属物ではなく、織手の方の思いを表現するにはどういう形が最適かを議論し続けてきました。

「OBI」シリーズ開発において、椅子は強く主張することなく帯とその結びを盛り立てる役割を求められています。我々のシンプルなデザインの椅子は、それとうまく調和できるようにさらに不要な部分をそぎ落として作りました。そして帯とその結び方は、着物の表現をさらに豊かにするものとしての存在から、椅子に移されることによってその空間全体を彩る物として広がりました。

西陣connect

チーフアートディレクター 三宅 達也

＜COMMENT＞

コラボレーションによるプロダクト開発にあたって大切にしたポイントは「西陣らしさを無くさずに、互いの個性を生かし、どうつないでいくか？」ということです。今回目指したのは、西陣を引き立てることではなく、個性と個性が融合することで新たな可能性を生むことです。西陣織の美しさや高級感をただ強調するのではなく、見た人・使った人にハッとする驚きやワクワクする気持ちが生まれるようなプロダクトに仕立てました。ここから西陣の新たな可能性を未来に向け発信していきます。